

古典落語大系

第三卷

責任編集 江國 滋

大西信行 永井啓夫

矢野誠一 三田純一

三一書房

古典落語大系 第三卷

一九六九年六月三十日 第一版第一刷発行
一九七九年二月十五日 第一版第三刷発行

編者 江國 滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

© 一九六九年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一) 三二三一〜五番

郵便番号一〇一

振替東京九一八四一六〇番

印刷所 株式会社三陽社

製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

古典落語大系 第三卷 目次

山号寺号（さんごうじごう）——山号寺号の原型……………	七
金明竹（きんめいちく）——『金明竹』と三遊亭金馬……………	三
石返し（いしがえし）——下戸の笑い……………	二四
三人旅（さんにんたび）——三人旅はひとり乞食……………	三五
初天神（はつてんじん）——落語の子ども像……………	七二
かつぎや——吉凶今昔……………	八三
茶の湯（ちやのゆ）——『茶の湯』の落ち……………	九六
写真の仇討（しやしんのあだうち）——写真と落語……………	一四
かんしゃく——わが憧憬……………	一〇
四段目（よだんめ）——立見席にて……………	二六
蔵前駕籠（くらまえかご）——決死隊讃……………	一七
洒落小町（しゃれこまち）——優越・共感・羨望……………	一四六
壺算（つぼざん）——数……………	一五
碁泥（ごどろ）——忘我の境……………	一四
のめる——何気ない佳品……………	一七三

盃の殿さま（さかずきのとのさま）——「盃」是非論……………	一八三
位牌屋（いはいや）——『位牌屋』のなかにある仕方ばなしについて……………	一八四
搗屋無間（つきやむげん）——「梅ヶ枝」とK……………	二〇六
明 烏（あけがらす）——ある「明烏」……………	二四四
猫の災難（ねこのさいなん）——独白と科 しぐさ ……………	二四四
強情灸（ごうじょうきゅう）——強情のむくい……………	二四六
長屋の花見（ながやはのはなみ）——『長屋の花見』と『貧乏花見』……………	二五五
麻のれん（あさのれん）——芸人の知恵……………	二七七
片 棒（かたぼう）——東西共通……………	二六三
そば清（そばせい）——「そば清」……………	二九一
お直し（おなおし）——ある夫婦……………	二九六
芝 浜（しばはま）——三木助のではない『芝浜』……………	三二一

装幀 長尾みのる

古典落語大系 第三卷

山号寺号（さんごうじごう）

吉原でなにがしという任官のある太夫衆になりますと、なかなかこればかりじゃない、といって勅任官になるほどの利巧は幫間たごもにはおなりにならない。吉原の太夫衆でもなく、柳橋でだれ、大坂町住吉町でそれがし金春赤坂でだれ外神田でだれという上等の幫間じゃない、どこの町内に巢をくつているのかねぐらのほどもわかりませんような、南風の時には下谷の方をフワフワ、北風に風が変わると神田の佐久間町の方へフワフワ出て来ようという、鮑ッ屑はなみたような幫間にとつかまると実にどうも始末にいきませんもので。

「オヤ若旦那、どちらへ？」

「親父の代参で恵方まいりだ」

「へエ結構ですな、恵方まいり。お供が願いたいねえ」

「願いたいったって、お詣りだよ」

「ですからそのお詣りのお供をぜひ願いたいんで。ねえ。相変わらずいい装なましてらっしゃるよ、若旦那は——乱立古渡りのお羽織、当世風に襟幅をせまくして、胴裏は蝦夷錦の陣羽織をほどこいたんで、ようがすな、お召は市樂でお下着は柳川の琉球紬で——いただきたいねえ。わたしはこの間ある織物会社の旦那さまにごひいきとなりましてね、かすりの結城紬を一反いただきましたが、上等でげすな、十三円なにがしもしようといういいのをちようだいしましたから、あなたに差し上げて……二十円いただきたいね」

「なんだい、おい、差し上げては感心だが、あとで金をいただきたいは恐れ入るな」

「へへへ、まことにどうも。かしこいお紙入れですねえ、金皮の二つ折り、りっぱなもので、なかにどのくらい札が入っているか拝見を……」

「おいおい、人のふところを改める奴があるか」

「……ほんとに、今日は恵方まいりにおいでになるんでげすか？」

「ほんとだよ、成田山へおまいりに」

「ほう、新勝寺へ」

「いえ成田山へ」

「ですから新勝寺へいらっしゃるんでげしょう？」

「わからない男だな、成田山へ行くんだてえのに」

「だから新勝寺じゃありませんか。ご存じのくせに困りますな。成田山が新勝寺、東叡山は寛永寺、金亀山浅草寺、万松山泉岳寺、一縁山妙法寺、池上山本門寺——山号寺号てえものは、どこにもあるじゃありませんか」

「うん、こりゃあ恐れ入った。お前はたいへんに物知りだね。するとなにかい、どこにもあるてえと、この近所にもその山号寺号、あるかい？」

「弱ったな、どうも……」

「弱ることはないだろ。お前も幫間の片割れじゃないか、いってごらんよ、寺でなくとも山号寺号、寺のように聞かしたら、五十銭あげよう」

「五十銭——ほんとにくれますか？」

「おれが嘘をつくものか」

「アノ五十銭てえと、十銭銀貨が五つでげすよ」

「きまつてるよ」

「一錢銅貨なら五十、十文銭なら数知れず」

「あげるよ、きつと」

「ボンと手を打って」そうとお話ができれば、考えますよ、わっちは、ええ、一心不乱に考えます……ええっと、若旦那」

「うむ？」

「むこうに大紋付の半天を着た若い衆が垣根をこしらえてましょ？」

「ふん」

「あれで一番見立てやした」

「なんとできた？」

「植木屋さん建仁寺でえのはいかがでげす？」

「植木屋さん建仁寺、なるほど、うまいな。よし、五十銭、あげるよ」

「おありがとうござい……。ア、またありました、向うからお盲が杖について来ましょ、あんまさん揉み療治なんてのはどうでげしゅう？」

「あんまさん揉み療治か、五十銭あげましょ」

「向うに見えるでしよ、漬物屋さん金山寺」

「うん、五十銭だ」

「時計屋さんいま何時？」

「あるねえ、それ五十銭」

「餅屋さん道明寺、お巡査さん一大事」

「まとめて来たな、ホラ一円上げるよ」

「お嫁さん拭き掃除」

「五十銭だ」

「お乳母さんが大事」

「うん」

「軍医さん荒療治、隠居さん茶焙じ、お姐さんいい返事」

「待て待ておい、ちよいとお待ちよ。おどろいたねえ、どうも……ずいぶん持っていかれちまったよ」

「へへ、このお金でいまに幫間銀行てえのを建てやす」

「欲にながるてえと出るもんだねえ、人間の知恵てものは……よし、じゃあこんどはおれが考えよう」

「おや、若旦那が？　よォ、ご趣向ご趣向」

「素人だからうまくいかないかも知れないがね……さっきからお前にやった金、ちよいとここへ出してごらん」

「若旦那にいただいたお金を？　ここへ？」

「そう、みんなお出し」

「これをこう……出しますってえと、どうなります？」

「こいつをみんなこうやって……ふところへ入れるよ」

「はあはあ、ふところへおしまいになる？」

「それからこう……尻をはしょって、一目散随徳寺——」

「あっ、南無三仕損じ」

『甲子夜話』八十七卷に、

一日嫖客あり、途に幫間に逢う。客問いて曰く「何宗の寺も何々山何々寺と称す、いかなる故ぞ」幫聞すなわち答う「寺に限らず」客の曰く「聞かん」折ふし御藏前をゆく、幫聞左を顧み「見給え、梅花散ふき楊枝」客笑いて黒舟町にいたり「ここは」と問う。また顧みて曰く「大家さん月行事」客また急に路人を指し問う。即ちいう「乳母さん子を大事」客喜び曰く「さらば行々問うべし」幫聞答の種つき逃去らんとして曰く「いちもく山ずいとく寺」僕しりえより曰く「旦那さんよい按じ」

落語の『山号寺号』も『甲子夜話』の型をそのまま踏襲していて、旦那は下男を連れている。さげも下男の「旦那さんよい按じ」で落している。だが旦那さんよい按じなど、現在の言葉じゃないし、下男をかならずしも連れていなければならないほどの旦那である必要も感じられないので、ここではわざと下男を捨て、さげも一つ前のそれで落とすことにした。

落語の一典型として収めたものである。

だから、なにに山なにに寺の山号寺号は演者それぞれがその折その折のニュース風俗をとりいれて工夫されたいと思う。鼻の円遊の速記にはその当時の大事件叶家お梅のことなどがとり込まれている。(大西信行)

金明竹（きんめいちく）

誰がかぞえましたものか、世のなかには「四十八ばか」と申しまして愚か者も多いようですが、その頭取が落語家だそうでございます。あまりありがたいことではございませんが、こういう愚か者のお噂がやはりお笑いも多いようでございます。

「与太や。なぜ、その、猫のひげを抜くんだよ。ねずみをとらなくなっちまうじゃあないか。お前だね、猫の爪をとっちゃったのは」

「だって、おじさんが爪を伸ばしておいちゃあいけない。爪をとれ、爪をとれていうから」

「そりゃあ、お前の爪をとれといったんだよ。ごらん、猫がどこへも上れなくなっちゃったじゃあないか。ホラ、なぜ、算盤をまたぐんだよ。だいいな商売の道具じゃあないか。脇きへよせておきな。さア、表を掃除しなさい。掃除というのは掃くんだよ。箒をもつて来て……ああ、ひどいほこりだなア。水をまきな、水を……。掃除をする前には水をまくものだ。おぼえておきなさい。水をまくったってうまいはずいがあるんだよ。植木屋さんがまくように、たいらに、水たまりをつくらぬように、……あつ、どうも相すみません。とんだご無礼をいたしました。見なさい。お前のためにあたしがあやまらなけりゃあならない。手もとばかり見て、水をまく方を見ないから人さまの足にかけてしまうんだ。もういいよ。表はいいから二階へ行つて二階の掃除をしなさい。……おまえもすこし小言をいってくれなくちゃあ困ります。いくらあたしの身内だからってまるであいつにかかりきりだ。小言で口がくたびれちまうよ。そりゃあ、あたしがやったほうがはやいだろうけれど、それじゃああいつのため

にならない……（と、上を見あげて）おや？ 二階から水がたれて来たよ。また何かやってくれたぞ。花瓶でもひっくりかえしたんじゃないか。おい、どうした」

「掃除する前だから水をまいた」

「ばかやろう。表と座敷といっしょにするやつがあるか。おい、雑巾をもってきておくれ。たいへんだ。……おい、与太、お前はいいから店番をしていなさい。店番を」

「そのほうがこっちも楽だ。なんだ。水をまけというからまいたのにしかられちゃアかなわないや。……おや、雨が降って来たぞ。もう少しまっていりゃア天から水が降って来るのにつまらないことをしたな。……ああ、表をあるいていた人がみんなお尻ししをまくってかけ出して行くぞ。おもしろいな。あっ、なんです」

「すみません。とおり雨でしょうからお軒先をちよいと拝借したいんですが」

「ええ？」

「お軒先をお借りしたいのですが」

「そんなものをもってかれちゃあこまるよ」

「いえ、もって行きやあしませんよ」

「傘がなくてこまるのなら貸してやろうか」

「そうですか？ 急ぎの用があるものですから、そうしていただけると助かるんですが」

「じゃあ、これをもっとおいでよ」

「どうも、ありがとうございます」

「与太や、どなたかいらっしゃったようだな」

「雨が降って来た」

「そうかい。なにかぬれるものはなかったかな」

「地面がぬれている」

「そうじゃあないよ。干し物でも出ていないかと聞いているんだよ。それにどなたかいらっしゃったようだが」

「お尻をまくって、毛むくじやらの脚を出した人がはいって来て軒先を借してくれって」

「雨宿りだろう。どうぞといつてあげたかい」

「いや、軒先なんぞもっていかれちゃあたひへんだから傘を貸してやった」

「へえ？ どちらのかただ」

「あちらのかた（と指さす）」

「いえ、どんな人だったというんだ」

「こういう……（と手で顔の形をつくってみせて）首があつて、顔があつて……」

「知っている人なのか」

「知らない人」

「知らない人に傘を貸しちゃあいけないね。番傘か」

「おじさんの蛇の目」

「あきれたやつだね。貸してくださいといわれても、知らない人だったらおことわりするものだ。雨の降っているときは入用でもお天気になればかえすのがおつくりになる。そういう時には、家にも貸傘もなん本かございましたが、この間からの長じけでつかいつくしまして、骨は骨、紙は紙とばらばらになりましてつかい物になりませんから、焚きつけにでもしようと思って物置きにほうりこんでありますってことわってしまいなさい」

「うん」

「わかったか」

「こんど、誰か来たらそういつてことわるよ。……なんだい」

「おむこうの近江屋ですがね。押入れにねずみを追いこんじまったんですが、猫が遊んでいたら借してください」